キミが好きだった

潤

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
キミが好きだった

【Ｎコード】
Ｎ０９０８Ｐ

【作者名】
潤

【あらすじ】
高校生の和田　清盛には
好きな人がいた。
その相手から遊ばないかと誘われた。

「麻衣ー。
昨日のテレビ見たー？」
「え、なにそれ？」
「麻衣の好きなアーティストが出てたよ」
「えーマジでー。
メールで教えてくれたらよかったのにー」
などと重森さんが会話してくるのが聞えてきた。
それを聞いていた男子がいた。
そう、俺だ。
和田　清盛だ。
なぜ聞いていたか？
そんなもん決まっている。
好きだからだ。

自分でも最近理性をコントロールできない。
四六時中考えているのは
重森さんのことだ。
となれば、遊びに誘って
そこで告白するか。
いや、待て。
少し話したことはあるが
遊びに誘うほど仲良くはない。
キーンコーンカーンコーン。
休み時間が終わる時間を告げるチャイムが鳴った。
その次の授業。
英語だった。
この授業ではあたることがない。

ということで
俺は考えた続けた。
どーすれば遊びに誘えるか。
結局この５０分無駄に過ごしてしまった。
そう何も考えが思い浮かばなかったのだ。

そんな俺に神から声がというわけではないが。
それに近いことが。
「ねぇ、和田君」
なんと重森さんから話しかけてきた。
「何？」
「今度の土曜あいてる？」
あなたがあいてると聞けば
俺が答えるのはあいてるしかない。
しかしその日は塾がある…。
それは午前中だ。
「あいてるっちゃぁあいてるけど…」
まさか遊びに誘われるんではないのか？
「そかー。
あんさー土曜2時くらいから
ウチヒマなんよー」
「そーなんだ…」
なんかその雰囲気出てきたぞ。
「で、和田君。
遊ばない？」
なんとまー神様仏様、
この際だ、マホメット様にその他の八百万の神様でもいいや。
感謝いたします。
「おぅ。
俺もその時間帯ならヒマや」

「ＯＫ。
　あ、そーいや連絡先知らないよね？」
「あ、うん」
ここから先は小声だったが
「今携帯持ってる？」
「持ってる」
「赤外線で今送るから
　和田君も送って」
「了解」
まー小声なのは校則で
携帯持ってくるの禁止されてるからだ。
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

土曜。
約束の１時間前に俺は
待ち合わせ場所にいた。
そして重森さんがきた。
「え…」的な顔をしていた。
まー重森さんがきたのは
３０分前だったからな。
「早いね、和田君」
「おぅ。
　なんか待たせちゃいけんかなと思って
　少し前にきたとこ」
そして俺らは
カラオケへ向かった。
フリータイム５００円。
２時から７時まで歌い放題の
飲み放題。
といっても未成年だから

ソフトドリンクだが…。
いや、
別にアルコールを飲みたいわけではないが…。
というかカラオケにアルコールって
置いてるのだろうか？

よくよく考えたら
デートではないか。
2人きりだぞ。
もしかして俺
可能性あるんじゃないか？などと
考えてる気分ではなかった。

2時から4時まで2人で
交代で歌い続けた。

4時から少し休憩に
話していた。

「でさー、たまにーなんだけど。
勘違いだったらゴメンね。
和田君、休み時間ウチのこと見てない？」
「へ…」
俺的には誰にもバレずに
よくチラ見していたつもりだったんだが…。
「気のせいだよね」
「あー…
気のせいじゃない」
少し小声気味に俺は答えた。

俺的にはカラオケの画面から流れる
音でバレないような小声にしたはずだったが。
「へ？
　なんかいった？」
「いや、何も」
うむ、気付かれてないならいいや。

コンコン。
ノックだ。
はい。
カチャ。
店員さんがやってきた。
そーいえば途中で俺の歌ってる番に
重森さん曲入れてから
何かを注文してたな。
その何かが届いたのだ。

それはフライドポテトだった。
（よし…。
　これで少しは話ずれるか…？）
「まー歌い疲れたろうし
　食べながら話そうよ」
「…あぁ。
　って結局のどを使うがな」
「そーだね。
　でもまーそれは置いといて。
　ウチね、趣味でね。
　マンガ書くんよー」
「へぇー」
「意外？」

「いや、意外ではない。
女の子だからやっぱ
ジャンルは恋愛？」
「あったりー
読んでみたい？」
「うん」
「そっかー。
今度いいの書いたら
持ってくるね。
でさー。
最近ネタ切れ中なんよ」
「へぇー」
「和田君、ネタない？」
「ねぇな。
わりぃ
あー…」
このとき俺はとある発想をした。
それは俺と付き合ってそれをネタにした
マンガにすれば？というものである。
しかしそんなもんいえるわけがねぇ。
なんたって告白だぞ。
「あー…何？」
「いや、なんでもねぇ。
俺のくだらん発想だがー…」
「くだらなくてもなんか
ネタになりそうなら
なんでもいいの。
和田君なら特殊な恋愛してそうだから
今日誘ったの…」
「特殊な恋愛っておいおい

俺は彼女いたことねぇよ」
「じゃーちょっと前に言った
くだらない発想を…。
マジで頼れそうなのは和田君だけなんだよ」
「驚かんとってな…。
まー今おもいついてんけどさー」
頭を掻き、できるだけ重森さんを見ないように。
「あー」
言おうとしたら
つい意識していえない。
直に告白ってこんな感じなのか。
「あー…？」
「あくー」
「あくー…？」
「あくまでー…。
ネタになればいいなというだけだが…
いったん…」
「あーありがとー！！！」
重森さんが当然謝辞を述べた。
「何が？」
「それだよ。
今までウチのマンガ
男子から告白さしてたんだけどさー。
なんかいつもガツンと
カッコよく告白させてたんだよねー。
うん。
今の和田君みたいな
優柔不断というか
ためらいながら言うのもアリだね。
ありがと」

そういって握手を求められた。
それはもうあなたが握手をというなら
喜んでこの手を差し出しますよ。
そしてなんかちいさなノートを
だして「ためらいながら告白」とメモってた。
その後重森さんはテンションが上がったようで
バンバン歌いだした。
まー俺も交互に歌ったが…。
ーー

書いたというマンガを読んでみた。
まー内容はこう。
『主人公の斎藤　綾音は
サッカー部のマネージャー。
いつもハキハキしてる
キャプテンに好意を寄せていて。
そのキャプテンに
告白される』

しかもそのキャプテンの
告白のしかた。
シュチュエーションはこうだった。
大事な試合の前に呼び止めて
『あーなんというかだなー
えーそのーなんだ。
今日の試合、
勝ってお前にプレゼントしたいものがある』
というが、
試合は負けてしまう。
男泣きしながら綾音に
背中さすられて。
『シクシク。
綾音に勝ちをプレゼントして
告白するつもりだったのに…』
『ありがと』

で、終わってた。
まーもっと奥が深そうだったが。
俺にわかったのはこれだけだ。

そして俺は1日で読んで返すのもどうかと
思いもう1日借りることにした。

そして返そうと思った日。
気付いたが渡されたのが金曜日。
読み終えたのも金曜日。
つまりその翌日。
土曜日である。
呼び出すのはどうかと思い、
月曜日に返そうと思った。

そんな土曜日。
ブーブー。
俺の携帯がバイブがなった。
メールだ。
誰だ？
重森さんからだった。

「金曜渡したマンガもう読んだ？」
だった。
「読んだよ。
感想は言った方がいい？」
「それはどっちでもいいよ。
それより今日ヒマ？」
「んーヒマだよ」
そりゃあなたがヒマかと問えば
俺はヒマだと答えるに決まっている。
事実ヒマだったしな。
「今から学校の近くの公園来てくんない？」
「あーＯＫ」

「あのマンガ持ってきてね。
友達が読みたいっていっちゃって」

ということで
学校近くの公園。
今日は先に重森さんがいた。
「待たせてゴメン」
「いいよー、ウチも今きたとこだし」
「はい」
そう言ってマンガを渡した。
「恋愛マンガははじめて読んだけど
おもしろかったよ」
「そうかい？
ありがとー。
貴重な読者の意見だー。
あ、そーそー。
キャプテンが試合の前に
綾音に
『あーなんというかだなー
えーそのーなんだ。
今日の試合、
勝ってお前にプレゼントしたものがある』
って言うシーンあるでしょ？」
「あったあった」
「そこのセリフは和田君をイメージしたんだよ」
「やっぱそーか。
なんかそんな予感してたんだよ」
「あっららー。
バレてましたか。
この後、琴音が読みたいって

言ってたけど
そこ和田君イメージしたってバレないかなぁ？」
「琴音？
あー蒼井か。
大丈夫だろ。
親しくねぇし」
「そっかー。
じゃぁね。
バイバイ」
「バイバイ」
自転車で走り去る
重森さん。

…。

「重森さん！！！！！！！！！！！」
ものすごい大声で叫んだ。
それに気付いた重森さんは近くまで寄ってくる。
「ん？何？」
「あー好きです。
付き合ってください」
「ごめん。
好きだけど…。
もう時期受験だから
リアルな恋はしないって決めたの…」
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
それから約１０ヵ月後。
俺は専門学校生になった。
俺は快速電車に乗って
帰宅途中だった。
ガタンゴトン。

「ふがっ」
んあぁ？
夢か。
まー夢というより
過去を思い出してたな。
懐かしいな。
そーいや今ごろ重森さんは
どーしてんだろうね。
どっかの有名私大行ったってとこまでは
知ってんだが…。
久々にメールすっか。
「お久ー。
元気？」
ピ。
送信。
次の駅で聞き覚えのある声がした。
「あ、メールだ」
重森さんの声だった。
「よいしょ」
斜め前に女性の乗客が座った。
まだうとうとしてた俺に声がかけられた。
「あ、和田君…」
「重森さん…」
「久しぶりだね…」
「うん」

その後どーなったかは
ご想像にお任せします…。
決してやらしい方向へいってませんので。
そこだけは勘違いのないように…。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0908p/

キミが好きだった

2010年11月23日18時11分発行